

令和7年度 農村 RMO 推進フォーラム（九州農政局）

パネルディスカッション

日 時：令和7年11月27日（木） 11:25-12:10（質疑：13:20-14:05）

場 所：市民会館シアーズホーム 夢ホール（熊本市民会館）2F 大会議室

司会：大分大学経済学部 准教授 山浦 陽一 氏

パネラー：

【協議会】宮地岳みらい里山協議会 代表 田中 大地 氏

【中間支援団体】一般社団法人ススメル 代表理事 黒田 駿平 氏

【市町村】五島市地域協働課 係長 山下 大輔 氏

地域、伴走支援、行政と、違う立場から、それぞれ話を聞かせていただいた。さらに議論を深めるため、他の登壇者に聞いてみたいことを出し合っていたきたい。

山浦氏（司会）

若者会による草刈り対応という話があったが、どうやって人を集めているか。

質問者：山下氏（五島市地域協働課）

回答者：田中氏（宮地岳みらい里山協議会）

- ・ 若者会のグループLINEを作り「この日にします」と流すと10~20人近くが集まっていた。
- ・ 金銭も発生するが、「俺らしかおらんけん、宮地岳の土地をどうにかしていかないといけない」という気持ち強い人たちがばかりなので集まっていた。
- ・ 謝金の原資は中山間地域等直接支払交付金や多面的機能支払交付金等で、事務局に頑張ってもらっている。時給は1,000円程度だが、来年から最低賃金も上がるため考えていかないといけないと思っている。

若くしていろんな組織を束ねていて、ご苦労もされているんだろうと思うが、組織のまとめ方・気をつけている点を教えてほしい。

質問者：黒田氏(一般社団法人ススメル)

回答者：田中氏(宮地岳みらい里山協議会)

- ・ 学生時代からずっと宮地岳をどうにかしていきたいと思っていた。
- ・ 認定農業者になったのが24歳。それから自分の農業を本格的に取り組んだ。そこから、まず商品を手にとってもらうために「どういう商品を作れば手にとって買ってもらえるか」を考えたり販路を見つけたりしてきた。
- ・ 飲み会や人の話を聞くのが好きなので、いろんな人と話して、時にはぶつかることもあるが、協力してもらっている。
- ・ 周りにサポートしていただくことも結構ある。自分が思っていることを突き通すのではなく、時には折れたりもしながら、周りの人からの意見も聞ききながら助けてもらっている。

先程朝5時に起きたという話をしていたが、朝は得意か。

質問者：田中氏(宮地岳みらい里山協議会)

回答者：黒田氏(一般社団法人ススメル)

- ・ 個人的な話をすると早起きが苦手。例えばお祭りとかイベントの時の集合時間が7時の時には頑張って7時に行くが、地域の皆さんが6時ぐらいから準備を始めている。7時に行ったら「遅らせえわ。もう終わったわ。」と毎回怒られる。
- ・ ただし、7時という集合時間があっても怒られるから、じゃあこの町の文化は30分早く来なきゃいけないということを後世に継承すべきことかということそうではないとは思っている。
- ・ (山浦氏) これまでのルールや雰囲気はあると思うが、どこかのタイミングでそれを見直す、その最初の問題提起を黒田さんがされているということかもしれない。

地域リーダー、伴走支援、行政の担当者、それぞれのお立場があるが、RMOに関わっていくときの自身の強みと弱みについて教えて頂きたい。

山浦氏 (司会)

黒田氏(一般社団法人ススメル) :

- ・ 強みはストレス耐性があること。メンタルが強いという表現になるかもしれないが、バチバチにディスられても、ある程度は耐えられるという忍耐力がある。
- ・ 弱みは、言われたことを1日寝たら忘れてしまうこと。ネガティブなものだけ忘れっぽいのだったらよいが、大事なことやポジティブなものも忘れっぽい点は弱みだと思っている。
- ・ (支援する際に) 1年目と2年目の上半期は忍耐の期間だと思っている。プレイヤー、マネージャー、サポーター、登場人物の誰かから愚痴が出た時、会議で言ったことや自分が発言したこと、議決したことが翌日になって覆ったりすることはどこもあると思う。その時は耐えるかバチバチに行くか、どちらかになる。

山下氏(五島市地域協働課) :

- ・ 出身が五島列島の中の奈留島という小さな島で、地元の若者を中心に団体を作ってイベントや海岸清掃をやっている。行政としてではなくて一住民としてやっているのので、地域活動をやりながら行政の立場で支援もやっているというところで、両方の立場からアドバイスや相談ができるのが強みだと思っている。
- ・ 弱みとしては、奈留島は漁業の島で農業者が1人もいないことから、全く農業に触れてこなかったこと。同僚が草刈りで休むとか、田植えで休むとか、そういうことが感覚的に分からないところがある。

田中氏(宮地岳みらい里山協議会) :

- ・ 人と話していても、できるだけ楽しくしたいと思っている。
- ・ 苦手なのは、弱みを伝えることと、頭で考えていることがなかなか伝えられてないのではないかと思う時があること。
- ・ (山浦氏) 自分が地域を引っ張っていかなきゃという使命感もあると思うが、それだけではなく、笑顔とか、地域の皆さんとの輪のようなものがないと、うまくいかない。指摘のように正しさだけではなかなか前に進んでいかない場面もあるということだと思う。

5年後、自身と地域とのかかわりはどうなっていそうか、また地域はどうなっているか、どうしていきたいか等、将来のイメージについてコメントいただきたい。

山浦氏（司会）

黒田氏（一般社団法人ススメル）：

- ・ 日南市もまちづくり協議会、地域運営組織が9つあって最初は自分たちがしたいということからスタートしているはず。want から始まったのに、10年たてば20年たてば、全部 must になって辛いものだけ残っている状態。農村 RMO の中でもそういうことは避けたいと思っている。せめて can と want だけで5年後も迎えられるとまだ続けやすい。誰も辛い思いをせずに地域づくり活動が続いていくのかなとは思う。
- ・ （山浦氏） must でやっているようなものは見直してもいいし、また新しい want や can が出てくるサイクルを黒田さんたちがサポートしながら作っていくということかと思う。

田中氏（宮地岳みらい里山協議会）：

- ・ まず商品開発。宮地岳の特産品は、これから出来ていけるものがあるのではないかと。まだ眠っているものがあるのではないかとと思っている。今作っている商品をもっと効率的にできる施設を作るなど、形になればいいと思っている。
- ・ （山浦氏） さきほど若者会をご紹介いただき、それ以外にも鳥獣調査隊・捕獲隊・ドローン隊・竹やぶ隊など、色々な隊ができてきている。今後も仕組みづくりというか、適切な声かけ、呼びかけができれば、まだまだ地域の力は引き出せるなど、そんなふうにお話を伺った。

山下氏（五島市地域協働課）：

- ・ 正直、5年後どうなっているのか全然見えない。最近集まった時も来年度の事業計画をどうしようという話をしてしたが、1年後どころか、少し先もまだ見通せない。しかし、みな地元愛が強い。そこを実践に移していき、地域をちょっとでも元気にしていてもらいたい。そのためにはリーダーとマネジメントできる人が必要ということで、そういう人たちの成長も期待している。

- ・ (山浦氏) 山内の皆さんは地域が好きという気持ちが特に強いということだが、これまでは活動に十分つなげられてなかった。今は色々な形でつなぎ始めている。プロジェクトのマネージャー役の重要性も感じているということなので、5年後はマネージャー役の人が五島市にもいてくださるのかなと期待している。

質疑応答

まず自分たちのやりたいことがあり、それが決まってから活用できる補助金等の申請をすべきか、または、外部の事業や補助金がまずあって、それに合わせて取組を検討(まとまったお金があったほうが周囲は興味を持ってくれて進めやすい)すべきか。

質問者 A

田中氏(宮地岳みらい里山協議会) :

- ・ 日頃から自分たちがやりたいことが常にあり、その場合に補助金の手助けになるということかと思う。

黒田氏(一般社団法人ススメル) :

- ・ やりたいことや課題を積み上げた上で申請する・しないを決めるという一択だと思う。入口と出口が大事で、これをしたいと思った時に入口は農水省だけじゃないはず。他の省庁の補助金や、別の資金調達かもしれないが、例えば農村 RMO などの大きな額を引っ張ってくると入口がそれになる。そうすると本来やりたかったもの、本来目指していた出口に繋がらないのではないかと思うので、最初は議論して検討するほうが良いのではないかと思う。

山下氏(五島市地域協働課) :

- ・ 私も積み上げのほうがいいのかなと思っている。五島市は平成 26 年に全地区一斉に設立し交付金があるところからスタートしているので、補助金があるからこの事業を続けようかという感じがある。途中で「やらされ感」というか、補助金があるからこの事業をしないといけないと、疲れてしまってあまり良い影響がなかった。もちろん

活動する協議会によっては補助金が用意されていたほうがいい場合もあるが、全体的に補助金ありきよりも、積み上げ方式のほうがいいのかと思う。

現在若手中心の6人のチームメンバーで取り組んでいる。会社組織の場合、金銭的なインセンティブによりメンバーの思いを引き出したり、能動的な行動を引き出したりするのが簡単だと思うが、地域組織の場合、明確なインセンティブがない中でいかに行動レベルの積極性を引き出し、自分事化していくかというところが非常に難しいと思っている。お三方の立場からアドバイスいただきたい。

質問者 B

山下氏(五島市地域協働課) :

- ・ 無償ではなく有償ボランティアという形で取り組むようにしてくださいということ伝えてる。また、金銭的なものではないが、地域の中で危機感を共有するために、地域ごと、年代ごとに具体的な数字を示し、実際に自分たちの生活がどうなるかという危機感を持ってもらいながら考えてもらうことをやったこともある。

黒田氏(一般社団法人ススメル) :

- ・ 今のお話を聞いていると法人格を有さないNPO組織なのだと思ったが、例えば活動する時に、NPO組織でも日当や旅費等も出したりするので、そのような支給の仕方はあるかと思う。酒谷地区ではコミュニティスペースを運営している。そこでは70代以上の親分たちが来てくれるが、何も求めてないのに草刈りやってくれたり、焼き芋を焼けるドラム缶をカスタマイズしてくれたりする人たちもいる。また、ゴミ捨てをしてくれるお母様たちもいるが、そういう人たちは賃金を求めているというより、地域内での自分の出番や役割を欲している、求めているというふうに見ている。活動、プロジェクト単位で有償なもの、無償なものを分けていくと可視化しやすいと思う。

田中氏(宮地岳みらい里山協議会) :

- ・ 一人ひとりと1対1で話し、それぞれがどういうふうを考えているかを確認し、みんなで一緒に取り組めるようにできたらいいと思って取り組んでいる。いつも楽しくで

できればいいなという気持ちで皆さんとも関わっていったらと思っている。

農村 RMO の活動を開始して半年経ったところだが、行き詰まりを感じている。黒田さんがおっしゃっていた、積み重ねの中でどういう形でみんなを引っ張って最後のゴールまで持っていければいいかということ自身も常に考えているが、どれぐらいまで頑張ると峠を越えられるかということがあればお伺いしたい。

質問者 C

黒田氏(一般社団法人ススメル) :

- ・ 先ほど1年半はかかると言いましたが、それは私の実力不足なだけであって、上手な方やったらもっと短縮できると思うが、お話を伺っているとご自身も含めて世話人の方がちょっとしんどくなっていると思う。そもそも誰のためにやっているのか、誰が困っているのか。世話人の方はお仕事する上で困っているとは思いますが、世話人というポジショニングなので多分困ってないはず。困っている方はそこに住んでいらっしゃる方だと思うが、その方たちが何を困っていて、どこに向かって行ったのかということを書きでもいいので書いてみると見えてくるものがあるのかなと思う。
- ・ さっきの出番の話になるが、自身は、みんなが目指そうとしているプロセスの過程でルートから外れないように手綱を持つ役割なので、引っ張ってはいない。酒谷の中にもリーダーがいる。その人たちに自覚を持って引っ張ってもらう。それを後方支援するという役割です。もう1度原点である1年前に戻って、地域の中にどんな課題があって、何をしたいと申請したのか、今どういう登場人物がいて、どういう役割なのかということを書いてみるとすっきりするかもしれない。

黒田さんにお尋ねしたい。中間支援組織を県の中でも育てたり、作ったりということも必要なのかなと今考えているところ。先ほど結構面倒くさいこともたくさんあるとおっしゃったが、そう言いつつも中間支援の業務に手を出そうと思われた理由やきっかけ。また、ある程度の利益や収入がないと継続できないと思うが、このぐらいの収入、利益があればこういう業務は継続できるという、損益分岐点的なラインの考え方が、もしあれ

ば伺いたい。

質問者 D

黒田氏(一般社団法人ススメル)：

- ・ 引き受けた理由は2つある。授業料を払って学ばせてもらうのが普通に義務教育の過程であるのに、中間支援組織として、お金をもらって学べるということはありがたい話だと思う。ヒアリングや調査ということで、集落の住民の1時間とか2時間大切な時間を取る。自分たちは収入が生じているが、集落の住民には収入が生じてない。だから、この中間支援組織というのは授業料を払わなければいけないのに、授業料をもらいながらお仕事ができる素晴らしい位置づけなんじゃないかなと思っている。それが1点目。
- ・ 2点目の理由は、今後も地方は人口減少が加速化していく中で、チャレンジしなければ衰退が深刻化する。チャレンジするかしないかで、ただ指をくわえて、人が減り、集落機能が低下し、憩いの場も減るのを眺める・傍観するのか。私は日南市という町が好きで、できることであれば挑戦したいと思っているので、それが2点目の理由です。
- ・ 損益のところで言うと、益はあんまり考えないほうがいいかと思う。それが表に出た場合、経営感覚の中でプロジェクトが良い方向に進まないというのは経験談としてある。入ってきたものが全部出ていくトントンだったらいいと思う。収益ベースになると地域に落ちているお金を中間支援組織等に注ぎ込むってことなのでバランスが相当崩れてくると思う。本来、注がなきゃいけないものが他にあるはず。
- ・ (山浦氏) 中間支援組織、例えば酒谷地区から黒田さんに対して直接支援を依頼するというパターンもあるし、市や県の事業で派遣されてくるような、そういうタイプもありうる。直接地域が依頼すると、契約の金額がお互いはっきり見えて、関係がギクシャクするということもあるかもしれない。

まちづくりで研修会をやっているが、800世帯に回覧板を回してPRをしているが、だいたい800世帯に案内を出して、5~6名しか集まらない。アドバイスをいただきたい。

田中氏(宮地岳みらい里山協議会) :

- ・ 自分は仕事の内容や行動を見てもらい、理解してもらって、あの人頑張っているねって思ってくれるように頑張ってはきた。

山下氏(五島市地域協働課) :

- ・ 今は困ってないけど、将来、今の生活は続かないですよねということを伝えていくのも一つだと思うし、また、課題を解決する取組をやりましょうというだけでなく、例えば親子で参加できるイベントをして、将来を担う世代を少しずつ仲間にしていくとか楽しいこともやりながらやっていったらいいのかなと思う。

黒田氏(一般社団法人ススメル) :

- ・ 自分のところは毎日移住の相談や空き家の相談もやっていて、困っている人がかなり近い距離にいる日々なので、困っていることがないっていうのは非常にうらやましいなと思った。私も酒谷地区で1年目いろいろな調査をする時に、最寄りの公民館で集落単位で10人20人集めてやった。その時ゴミ捨ての課題なんて誰1人声を上げることがなかった。集落がもうけるゴミステーションまでゴミを運搬できないだろうという課題はあると思いつつ、集落単位での会合では全く声が出てこなかった。それはそうですよね。ゴミ捨てを運搬できない方は、最寄りの公民館まで来られないのだからという。だから、各地区にいる民生委員の方に、こういう課題ないですかと見守りするときに聞き取りをお願いしたことがあった。そうしたら、そういうゴミ捨ての課題とかが、潜在していたものがどんどん表に出てくるようになったということがある。困っていること、課題を掘り下げようとする、関わる人がどんどん減入っちゃうので、個人的にはあんまりお勧めしないが、やり方として、自分にとってメリットがある、理があるのであれば参画するんです。講演会や研修会をしても、自分が昨日より賢くなるっていうのは分からない。収入が増えるというメリットもない。だから住民にとって、ここに行けば面白い、いつもより楽しい日々を感じるようになったというものをやるといいのかなと思った。遊び場を作ったりするっていうのは結構楽かもしれない。例えば最寄りの公民館でお茶会をやるとかでも全然いいと思う。そこで集まると、いろんな人と膝を突き合わせて話

すことができるので、二次的な声が拾えるようになる。